



1964

東京オリンピック・パラリンピック

50周年

あの感動から半世紀。ことし2014年は、東京の、日本の、メモリアルイヤーです。

プレイバック！'64東京大会

50年前、日本中が歓喜に沸いた歴史的な大会を、あらためて振り返ってみよう。

20年越しの悲願、アジア初の快挙。

1964年10月10日、アジアで初めてのオリンピックが東京で開催されました。かつて第2次世界大戦の影響により、開催が決定していた1940年大会を返上した東京にとって、この大会は20年越しの悲願でした。同時に、93の国と地域から5,000人を超える選手が参加したこの大会は、国際社会に日本の成長をアピールする場ともなりました。



晴れ渡る秋空のもと行われた開会式。国立競技場に念願の聖火がともった。

日本選手団の活躍に 国中が熱狂。

1964年東京大会のメダル獲得数は29個。そのうち金メダル16個は、2004年アテネ大会と並び、現在でも歴代1位の記録です。特に東京大会から正式種目となった女子バレーボールでは、「東洋の魔女」と呼ばれた女子日本代表がソ連代表を奮闘の末に破り、初の金メダルチームとなりました。このほか、柔道や体操など「日本のお家芸」の競技でも、多くのメダルを獲得しています。

金	16
銀	5
銅	8

日本代表選手団のメダル獲得数



宿敵ソ連チームとの闘いを制し金メダルに輝いた「東洋の魔女」。



開会式9日前の10月1日、東海道新幹線（東京～新大阪間）が開業。

東京の近代化がめざましく前進。

首都高速道路や東海道新幹線など、大会開催に向けて東京のインフラ整備は飛躍的に進展しました。また、メイン会場となった「聖地」国立競技場でも大幅な改修が行われました。施設だけではなく、今ではおなじみとなったトイレやレストランなどの「ビクトグラム」も、海外から来られる方々への案内用として、東京大会を契機に考案されたものです。

パラリンピック定着の きっかけに。

1964年国際身体障がい者スポーツ大会は、東京オリンピック直後に2部制で開催。第1部は、ローマ大会に続く国際ストック・マンデビル大会*で、後に第2回パラリンピックに位置づけられました。第2部は、車いす使用者だけでなく、すべての身体障がい者と西ドイツの招待選手による国内大会でした。ちなみに「パラリンピック」という名称は、東京大会の際に日本のメディアが名付けた愛称です。
キーンリスのストック・マンデビル病院を愛称とする、障がい者スポーツの国際大会。



パラリンピック・国際身体障がい者スポーツ大会

1964年パラリンピック東京大会の公式ポスター。

スポーツの発展・普及にも 大きな効果が。

オリンピック以降、サッカー、バレーボール、バスケットボールなど実業団による日本リーグが次々に誕生。競技レベルの向上に大きく貢献しました。さらに、オリンピックに参加したコーチや選手たちが始めた水泳・体操などのスポーツクラブ（スクール、教室）も全国に波及。幼児から主婦、中高年まで、幅広い人々がスポーツに親しむようになりました。「観るスポーツ」から「するスポーツ」へ、劇的な変化をもたらしたのも東京大会でした。



大会後、水泳クラブなどが続々と誕生。全国的なスポーツブームが到来。

そして、6年後

TOKYO ● 2020 ▶



Discover Tomorrow

～未来(あした)をつかもう～

TOKYO ● 2020
みんなのTomorrow

東京都、被災地、全国のアスリート、日本中の皆様からの声を集めて、大会ビジョンをつくっています。
vision.tokyo2020.jp [facebook.com/tokyo2020.jp](https://www.facebook.com/tokyo2020.jp) twitter.com/Tokyo2020jp



協力

(一財)東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 (公財)日本オリンピック委員会 (公財)日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会

